

第3回佐久市こども・子育て支援拠点施設運営検討有識者会議議事録

1 日時	令和6年8月6日(火)午後1時30分から午後3時00分
2 場所	佐久市役所議会棟2階全員協議会室
3 出席者	○委員(名簿順) 学校法人十文字学園女子大学教育人文学部教授 向井 美穂委員 (オンライン)、 一般社団法人長野県助産師会佐久地区 柳沢 明子委員、 有限会社ケミカルエンターテインメント 代表取締役 島崎 直也会長、 学校法人佐久学園佐久大学信州短期大学部福祉学科こども福祉専攻 尾島 万里委員、 長野県佐久児童相談所 所長 渕上 瑞江委員、 佐久市市民活動サポートセンター センター長 栗津 知佳子副会長 ○事務局 市民健康部 工藤 清美健康づくり推進課長、市川 由希子課長補佐、 三石 恵子健康増進係長、 福祉部 工藤 基伸子育て支援課長、小林 利樹子育て支援係長、 大井 裕史、笹井 隆也
4 内容等	○会議内容 進行:工藤子育て支援課長 1 開 会 2 議 事 進行:島崎会長 (1)ワークショップの開催実績の報告 説明:市川補佐 (資料 2. 2-1.2-2.2-3) ○質疑応答 委員 ワークショップの今回の目的は、行政と市民活動団体と本当にざっくばらんに意見交換の場を作ればいいなと思っていただきました。事前検討も担当者の方のご協力をいただいて実施に至りました。今回、新たな拠点のワークショップの一環で行ったんですけれども、今回のワークショップをやって終わりというのではなくて、施設ができたあとも含めて市民活動団として、こどもの支援、子育て中の親子の支援をされている団体と行政がどう連携していけるか、継続的に今後に繋がるようなコミュニケーションの始めのきっかけになればと実施しております。 会長 僕も参加させていただいたんですけども、すごく皆さんから活発な意見が出ましてとてもいい会だったなと思います。市役所の方も一緒に参加してくださったので、よりぐっと関係団体の人たちも親近感がわいて、今後のいろんな、ざっくばらんに話すっていう機会のきっかけになったのかなって思います。今後、今回、関係団体ってことはないですけども、いろいろな人たちから意見を聞くということもすごくいいなと思いますので、例えば探究活動などで子育て支援みたいな

会長	のを選択している高校生とか、中学生などがいらっしゃるっていうことも聞いておりますので、そういう高校生とか中学生などの意見を聞くっていう場もあるといいなというふうに感じてますので、ご検討いただければと思います。 (2)相談支援について ・「親子一緒に育っていけるために拠点施設ができること」説明:市川補佐（資料3） ○質疑応答 親力、子力、私自身は幼稚園とか小学生対象のワークショップとかが多いですけど、イベントごととかに参加をいっぱいしてくれる子と、参加できない、なかなかご家庭の都合で参加したくてもできないっていうことがありまして「体験格差」とか「参加格差」があると思ってます。 そういう場所に、ワークショップに参加していただければ、子力みたいなものは伸びるんだろうなとは思いますが、まずは参加できないっていうこともあるので、定期的な、例えば学校や幼稚園で参加するもの、あとは親御さんが参加されるものとか定期健診などそれにくっつけるような感じで親御さんの講座的なものだとか、あとはこどもたちの体験の場みたいなものをくっつけるというような、来るのを待つのではなくて、こっちから出向いてくるようなことが必要だなと思ってます。 あともう1個はやはりこどもたちも特にそうですね、親御さんもそうだと思うんですけど、安心して体験できるとか、安心して自分のことが話せるとか、そういう安心できる場っていうところもすごく大事ななと思ってますのでそういう部分かなと思ってます。 議題2のところの抵抗感なくっていうところは、いろんな参加の形態というか、そういうものがあるといいのかなと思ってます。気軽に参加できるものとか、またまたじっくりと相談できるものっていう段階が見えて、いろんな選択肢が見えるような部分ものもいいのかなって思ってますし、あと先ほどおっしゃっていただいたようにその行政だけでは難しい部分もありますので、行政以外の団体とかと連携してるっていうところも含めて選択肢が広がってくるのかなと思っています。
委員	②のサービス利用への抵抗感をなくするためにできることでは、昨日1日長野市のこども広場じゃんけんぽんにいて助かったなと思ったことがあって、それは広場に利用者支援事業です、子育てコンシェルジュさんがいて、いつも利用者の日頃何気ないことを話し、その中で小さな相談を拾ってそれぞれの専門職の相談に繋げていくっていうことを頻繁にやっているんです。 もう一つは訪問事業。長野市はホームスタートというものがあり、夏の利用と冬の利用率がかなり違う。冬場、長野県は寒いと外に行けないっていうところがあって、来てくださっていう利用が多いです。訪問事業は寒いときこそ使っていただいて、暑くなると広場に出るような後押しをするっていうことも広場の利用に繋がっていくのかなと思います。
委員	議題が二つって指定されてるところで何か言うことは、ちょっと問題あるかもしれないんですが、気になったのが、母子保健事業って限定してますけど、一応児童福祉って幅広くやるっていうことでいいんですよね。ポピュレーションアプローチとか、乳幼児や小学校低学年ぐらいの育児のお困りの方を対象にしてみたいになってるんですが、広いアプローチももちろん必要だと

委員	思うんですが、発信できない方とか、こじれていって子育て支援拠点とかこども家庭センターのベースになるところであれば、その中からさらにそれでも困難を抱えている方たちを見つけ出して、そこにアプローチできるっていうことが大事かなって思ってるのでまずその前提で母子保健事業っていうところいただくと広くってところで、設定しなおしていただきたいと思っている。 あわせて②の事業とか利用抵抗感をなくすためにできることの話しなんですけれど尾島委員さんと同じような話でしても他のところの市町村でも行っている事業ではあるんですが、次世代訪問支援事業とかって家事支援とか、話に行くとか、結局来てもらえない人たちにアプローチするのは来てくれではなくて、行かなきゃいけないっていうアウトリーチかなんかと思っていて、その利用について、自分の家にメリットがある、自分が少し使いやすくなってことを実感してもらって初めての話で、市町村にはそのサービス事業について今度強制的に使うようにってそういうふうな措置をすることができるようになってる人と考えても、場合によってはそれらのサービス事業とかと合わせてアプローチしていくことが望まれているわけで、待ってて来ないからとかじゃなく、行って行ったところでもコンシェルジュじゃないけど、気軽にお話してあんまり押し付けがましくこっちのやることばかり押し付けてると抵抗を持たれてしまうので、元気？とか顔出しに来たとかってというような見守りとかそういったことがなんかもう、常日頃からあって、プラスちょっとニーズとか何かを察知したときに、どんな事業があって、ちょっと他ですごく良かったんだけどとかのアプローチ、他市町村だと保育園の登園支援っていうのはとても難しくて、それだったら乗ってくれという親御さんがいたとか、夜食べるものをちょっと食べさせてもらって落ち着かせてからか送ってくとありがたいねって言ったらそれなら乗っかるとか、具体的に本当に役立つものとともにサービスを受け入れていくというか、支援をしていこうという人たちをいいことだなと思ひながら、受けてもらってサービスに慣れてもらうっていうところなんかをやっているとところがありまして、本当に究極そういうサービスに繋がらない方はどこまでやらなきゃいけないってところで、そういったアウトリーチ型で御用聞きみたいなことをやって顔繋ぎをした上で、その家にフィットするようなサービスの方を紹介できるっていう体制が必要なのかなについては思います。 逆に言えばその議題 1 の方はその中で初めて相談する力とか、人を頼る力とか本当に難しい方は頼るところから関係者と繋がるるところからもう損なわれているので、人に頼るとか人の意見を聞いてみるとか、人の提案に載ってみるといったなかで、初めて少し成長してきたりコミュニケーションとか言って、親力というすごいレベルの高いところではなくて、人と話せるっていうところからみたい方たちが結構いらっしゃるので、究極の本当に困難な物に関してはそれかなと思います。 もちろん全体のもっとポピュレーションに関しては、本当に市民の方たちも意欲的ですから先輩たちとかいろんな方と繋がるってそういう仕組みが地域にあることで、そこで自分が人の役に立ったり人の力になったりとかが進んでいくでしょうから、それはもうそういう場の設定はいいと思うんです。究極本当に困り果てている家へのアプローチというのは、事業とともに話すところかだと思います。 今のご発言を受けて、一つ提案なんですけどもすごくいい指摘をいただいたなもしよければ対象が 0 歳から 18 歳までの、そうじゃどこに焦点を当てて、やっぱり本当にもう 2 年、3 年違うだけで、アプローチも必要なちょっと対象年齢を区切って 1 人それぞれの時間が許せば、議論した方が具体的にちょっと深まりやすいのかなんかと思ひていかげでしょうか。
----	--

事務局	はい、私が健康づくり推進課なので、母子保健というところで議題を出させていただいてるんですが、拠点施設は0から18歳までの方たちの相談を受けるっていうような体制を考えてはいるので、どの年代にどういうアプローチがいいかというような視点でお話をいただければ、本当に助かります。
委員	年齢で区切るのか。ニーズで区切るのか。ポピュレーションアプローチがまずあって、広くまず皆さんが利用して自発的にいろいろ動ける方たちってやっぱりいて、その中からのピックアップで、本当にニーズがある困難を抱えている方たちっていうのがあるような気がしました。 妊娠に関しても妊娠中のときでもそうですが広くまず見るちゃんとフィルターで、このうちアプローチいるなっていうのとアプローチが必要だとなったときに何をするかって手順かなと思うから広くやりながらあと狭くやるべきところ二つでいくと、自主性とか。市民団体の型と一緒にやれるところポピュレーションではいっぱいあって、本当に難しい形である専門領域とかね相談をきちんとやった方に繋いでいくということで、ニーズの区切り方かと思う。 母子保健分野で死亡事例とかはやっぱり0歳0ヶ月とか、ああいうところがリスクなんですよ。そこのニーズをきちんと児童福祉分野でリスト化するというか、そういうところにアプローチをむけ、抜けることがない年齢の区切りがないことがこども家庭センターの目的でもあったわけですから、やっぱりポピュレーションでいいのと、やっぱり母子保健の中でも強いニーズできたケースはどうアプローチするか区切り方があるのかな。
事務局	本当に困難な人は私達も関わりが難しいところはあるんですが、人それぞれちょっと状況が違ってケースが違ってというように考える課題も違ってくるので、もしできればポピュレーション的なところで全体にできるものというようにしていただけると、この今後の施設の参考にできるかなと思うのですが。困難な人の支援は本当に大切だし、難しいなっていうところでチームを組んでやっていかなくちやと思っています。
委員	ポピュレーションを中心に話すときには、必ずこの困難なケースはこうやるって予定が見えてればポピュレーションを中心に今回のポピュレーションの話ですよってことで、どっかで引っかかるのは一番困難抱えてる人たちがいろんな意味で虐待死に繋がるとか、いけないんじゃないかって感覚があるから、そこはきちんとここで別の場所で議論するとかでも、何かそこをまずポピュレーションの中で拾い上げたところは、きちんと個々が持つとかそういうのが見えてれば、ポピュレーションはまずこれですよという話になるのかなって順番かなと思います。
委員	私もちょっと専門的なところではないですけども、困難なケースとポピュレーションという言い方でやっぱり妊娠出産って割と傷つきやすいというか、明確にここまでが困難なケースでここまでは通常ですねって別れるものではなくて、紙一重の時期だと思う。そのなかで先ほど相談する力、人を頼る力が失われるっていうときに、やっぱり何で失われていくかっていうと、何かのところで行政と接点があったところで傷ついた経験がとか、相談しにくいと思う経験からどんどん人をたよらなくなっていくって、そこのシャッターを閉めさせないというか、シャッターを閉めるきっかけを

委員	なるべく作らないようにするっていうことは施設のあり方を考えるときに一つ視点としてあるかなと感じました。 もちろん支援の途中でそういったシャッターをおろさせないというのもだが、もともと人付き合いが苦手とか、学生時代からちょっとやっぱうまくいってなくて、その中で逃げるように彼氏に依存してとか、施設全体は人を傷つけないような体制が必要なんですけど、もともと苦手っていう方たちも一定数いらっしゃるってその方たちがやっぱり相談する力を持つとか、人とやり取りする力を持ってここの土俵に上がってくってとこもあったりする。ポピュレーションの場合はやっぱその相談にこういうところに来ない人とか、多分フィルターにかけやすい、検診による受診してないこととか望まない妊娠だとかちょっとはつきりとリスクになってるものとありまして、そういう方たちのやっぱ拾い上げ方っていうのは一つあって、そこでしっかりいろいろしながら話できる人だったら本当にそもそもこの拠点が温かい感じでコンシェルジュもいたり何か話したり先輩の方もいて話せる雰囲気だったら、自動的に話ができるっていうのが一つのフィルターかなとは思っていて、元から苦手でそういうとこ行かなくて1人こっそりみたいなそういう感じの方たちってのを把握する方法と、その方たちに何か理由付けて顔出しするつながる方法っていうことがあるかな。ちょっとそもそも相談する力があるかないかのわかれ目っていうのもある。
委員	妊娠したら妊娠届、母子手帳をもらいに来たところのアンケートで、どうという経緯で妊娠していたかっていうところの拾い出しとか、どういう支援者がいるか相談できるかとか、あとは自分がどんなふうに愛情で育てられたかどうかみたいなのところまで結構詳しく聞き取りを専門職が必ず佐久市はしているんで、そこで引かかったっていう形で、ちょっとこの方はしておいた方がいいよねっていう方については、早い段階で妊娠中に訪問を保健師さんがされていたりとかをしてみると思うんですね。あと出産終わって、妊娠終わった時点でできっとまた地区の担当の保健師が入っていくというのはされてるのかなと思うんですけど、もっと問題なのは、多分妊娠届が全く出さない、母子手帳ももらわず、病院を受診せず飛び込みみたいな感じで分娩していきなり何かこどもが手の中に入ってしまったみたいなの、じゃあどうしようっていうふうになるようなケースだと思う。 そこの相談にも乗っていくっていう施設の役割にはなと思うんですけど、かなりピンポイントになるので、そこはそれがそういう方がいたらこういうルートでさっき言われたみたいにそういうふうにして繋ぎたら確実にちゃんとフォローしてもらえっていうのが施設の中で、はっきりわかればいい。誰もがわかかっていて何かのきっかけでちょっと小耳にはさんだら、この人はちょっともしかしたら保健師がフォローできてないかもって思ったら、あのねってちゃんと相談乗ってくれる人がいるんだよと言って、きちんと繋げてくれるっていうふうには。私は担当じゃないとわからないですけどかじゃなくて誰もが知ってるというふうになるときと安心していうことになるんじゃないかなと思うんですね。それがだから浸透していったって、困ったら何か相談できるらしいよ乗ってもらえるんだって一みたいなのが、たくさんのお母さんたちのなかでも浸透してくると、あすこいくと助けてもらえるらしいよとかなんか話だけでも聞いてもらえるらしいよとかっていうのがちょっとずつなんか口コミじゃないけど広がってたり SNS やってるひとも多いので、どこどこに行ったら、いいうわさもわるいうわさも出てきちゃうんですけどでもなんかすごく良かったとかっていうようなことを言ってもらったりとか、話聞いてみようかなとか相談乗ってもらおうかなとかっていうふうになっ

たりするっていう気はすると思うので、今までのと組み合わせながらやれるといいのかなって気がする。

やっぱり時代的に本当に周りにお手本がどんどん少なくなってるっていう意味合いで、親力の引き出し方っていうか、親になるって言ったらどういうことなんだろうって、何か考えもしないまま大人になって、なんか何となく結婚して出産するものみたいに出産する方もいらっしやったり、こどもが欲しいから不妊治療して妊娠するってことが目標になっちゃって出産したらなんか全然思った生活じゃないみたい方もいらっしやったり、何かそんなふうな感じもすごくよくお会いするのと、あとやっぱ親のモデルが自分の親しいなかったりするんで、そことの関係性がやっぱり元々うまくいってない方は、出産終わって自分が子育てするときにやっぱりそこがもう一度再燃するっていうところで、苦しくなったりつらくなっちゃったりするっていう方もいらっしやったりするので、結構なんか効果的で、これやったらすぐに解決みたいなのが本当にないし、すごく長くかかる。なんなら何十年もかけて、そこはこう変えてからなくちゃってかわっていくところだったりするのかなと思うんですけど。

私あの助産師で勉強していくときに、最初に最初じゃないかな…母子保健というのは、親子のいろいろな悪い循環も断ち切れるのは母子保健なんだと学んだんですよ。

やっぱり自分が妊娠する命を宿すっていうこのタイミングっていうのは、やっぱりお母さんにとっては大きなきっかけになるから、親から子へ、良いものも悪いものも引き継ぎやすいんだけど、いいものは引き継いでいってもらったらいけど、悪いものは引き継がないように、断ち切るとしたら、ここなんだっていうことで。ここを断ち切ると、その後のいろいろなこと。例えば行政でそうやって、すごくハイリスクな人たちにすごく手厚くいろんなことやってるのってすごく労力かかるしマンパワー使ってるし、時間だっても何だってもいろんなものがかかるんだけど、そういうのが本当にこの妊娠して出産して赤ちゃんちっちゃいうちに大事に大事に育てながらお母さんも大事にしてもらって、何かこうああ、こうやってこどもを育てながら自分も育っていけばいいんだみたいなのができるようになると、その後のいろんな問題がすごく効果的に解決しやすいっていうかな。なんかそうそんなふうに最初に勉強したんですよ。

でも確かにそうだなと思って、他にもいろんな学習してきましたけれども、何か他のところっていういろんな問題とともに生きてく、結局そうは解決しないままいつちやうっていう感じなんだけど、この母子保健は本当に妊娠して出産して、ちっちゃいこどもを育てていくときっていうのはチャンスでもあるので、自分の仕事も意味があるなと思いながら、責任のある仕事だなと思ってやらせてもらってるんですけど、この拠点施設もそういう意味合いでここにきて本当によかったなってみんなが思えるような大きくなっていつちやうこどもたちは、お母さんってすごくつらかったかもしれないけど、大きくなっていったら忘れてっちゃうんですよ。

なんだけどでもあのときにあそこの施設に行って、相談できてすごく良かった。

すごく遺影にいてつらかったけどあそこに行ったことで、こどもも自分もすごくなんか成長できたみたいになれるよ、ようなそういう場になるといいんじゃないかなっていうふうにね、

そのためにはやっぱり人との繋がりというか、いろんな人を見るってことがすごく大事で、なんかこうやってやったらいいんだよとか教えてもらうっていうよりも、やっぱり人がやってるのみたり、いろんなこどもを見る。本当に知らないですよ。赤ちゃんってどういう生き物かも本当に知らないし、昔、オムツのコマーシャルで青いおしっこで、赤ちゃんっておしっこが青いんですかとかって

	いう言う人がいたとかって言ってなんかそんなわけないじゃんみたいな笑い話だったけれども、最近それは聞かないですけど、あんまりそういうコマーシャルなくなったんでね。 でも本当にそれぐらいのレベルで、こどものオムツ見て、どんなうんちしたらいいのかってみんな本当に全部検索して、写真撮ってみたい、本当にそういう時代なので何ていうかな、大人に喋るみたいに喋ってるお母さんが結構いたりするんですよ。 引き出し方、みんなで子育てできる場所にならないとなかなか難しいと思う。引き出すとか、伸ばすとか、私達が育ててあげるとかじゃなくて、集まればそこで勝手に育つて思います。だから行きたいなって思えるような場所になるといいのかなって私たちが育児してあげようとか育ててあげようとか、それはおこがましいんじゃないかなと思います。 今回たくさんさんの資料をまとめていただいて、いろいろな楽しみの方からの本当に熱の入った意見をいただいている、いろんなことが考えさせられるなと思いながら資料を読ませていただきました。私が一つ考えなきゃいけないなっていうのを相談支援を云々ってこともそうなんですけれども、子育てがしやすいっていう視点もちろん大事なんですけど、そうではなくて、こどもからの視点っていうのを捉えていくってこともとても大事なことです。つまり、こどもが育つっていいこと私もなんですけど、こどもが育つってことができるっていいことなのかなと思います。 だからこどもが安心して、この地域で育つっていいことが、中心にあるっていいことが必要になっていて、親御さんもそうなんですけど、我が子が楽しそうにしているのがこの笑顔はこの子が育っていると実感できるっていうことは親の力を最大限エネルギーになっていくんじゃないかなっていうふうに思っていて考えてみるとそのタイプの親に働きかけなければいけない家族家庭でももちろんあるんですけど、こどもが育つことで親が育っていくっていうそのこどもを中心に捉えてみるっていうところも、何か大事なことなんだよなっていうのを思います。 建物は子育て支援拠点施設が、こどもたちが夢中になって遊べる場所なんだっていうことが、広がっていくと、こどもたちは年齢にももちろんよるんですけどあそこに行きたいって思うわけなんです。こどもが行きたいと思う場所は親も行きたいと思う場所に繋がっていく。親に連れられて行くと段階の年齢のこどももちろんいるんですけど、それがいつの間にかこどもが行きたいって言って親は、そこに続いていく。続いて行かれるっていうような、そういう拠点事業になっていくのがすごくいいなっていうのをちょっとありました。そのこどもたちが楽しそうにしているっていうのは、できれば我が子が行きたいところからのスタートだとは思いますが、そうじゃなくてわが子だけでなくその友達っていう形でこどもが行きたいというふうな視点になっていくと、なんかいいなっていうふうにちょっと思っていました。 親の力を引き出すっていうことの最大限はやっぱりこどもの笑顔なんじゃないかなこどもが育つてると実感できることなんじゃないかなっていうふうに思って、こどもが中心になってこどもを中心に据えて、拠点事業っていうものを見てみるとまたちょっと見え方が違うんじゃないかなっていうことを感じております、感想っていう形ですみません。
委員	
会長	向井先生がおっしゃってくださったことで、僕も思ったのはそのこどもたちを介して、親とか知らない大人同士が繋がるってことがすごく大事だなと思っているので、先ほど柳沢さんがおっしゃったみたいに、そのこどもたちを介して親同士が集まるとかあとは親のモデルがなかなか周り

委員	にないですけど、そのこどもが育つっていうモデルっていう言い方あれですけど、このまま育っていく姿っていうのも、なかなか最近は見れないのでそういう部分でも向井先生がおっしゃったみたいなこどもたちの姿を見るとか、あとはこどもたちが行きたいってこどもたちが集まるってところはすごく大事ななと思いました。 移住されてきた方から聞いた話で、佐久はなかなか異年齢で遊べる場がない未就学児はここにわかれていて上の子の兄弟みんな連れて遊びに行ける場所が少ないので、いろんな人が子育てしてる姿を見るっていうところがやっぱりキーワードとしては異年齢で、赤ちゃんがいるけど、ちょっと大きい子がいる、中学生高校生に異年齢で交流できるというか、異年齢の人がまた、その場に自然に集うような仕掛けが作れるといいのかなと思いました。 この問いのところに戻って、この行政が実施する事業相談するへの抵抗感をなくすっていうところで、自分の出産直後を考えるといい母親として見られたいというか、こどもをだっこしながらスマホいじったら周りの人に言われるかな、それが例えば病院の検索であっても生協の注文であっても、スマホじゃなくて赤ちゃんを見てって言われたりするというようなプレッシャーだったりがあったな。そうするとやっぱりだんだんガードが固くなる、なんかよく見られたいと思う、弱いところを見せないというのをどう減らしていけるか、ガードをどう下げて、ポロツと弱音を吐けるような愚痴を言えるようなポロツと相談できるような環境をどう作るかが結構大事ななっていうのは個人的に感じていて、7月2日のワークショップのときにマッサージとか出てましたが、マッサージを受けながらちょっと弱音を吐けたりとか、ポロツとっていうのがキーワードかなと思います。 あまりガードが上がるということがないかな。バランスが難しいなと思う。いい親になる講演会とか結構それはそれでつらい時間になるだろうから、もう少し柔らかい感じでベビーマッサージしながらちょっと話をしてもらおうとか、ちょっと柔らかい集まるきっかけを与えながらっていうか、そこまでちょっと子育てってこうやるとうまくいくかもといった話も一緒に聞けるのが必要ななと思います。
委員	この前つどいの広場の中込で、私がベビーマッサージの講座で、一年間に何回かやってるんですが、お母さんの体のケアをする講座のときとベビーマッサージのときがあるんですけど、ベビーマッサージの講座の日に、たまたま午前中に中学生の性教育に行った日だったんですよね。人との付き合い方っていうか、先生からのオーダーは男女交際だったのですが、男女交際とかじゃなくて、人との付き合い方みたいな話で男女だけじゃなくてみんな、お互いにいい心も体お互いにいい距離感っていうのは、やっぱり人によって違うからというような話をしたって言うのを、マッサージしながらちょっと話をして、とにかく今みんな赤ちゃんたちはお世話してもらっている時期は、たくさんお母さんたちに大好きっていっぱい言ってくれるし、いっぱい触らせてくれるからもうとにかく触りまくってねみたいな話をたくさんしたんですよね。しかもみんなが大好きっていう気持ちで、やっぱり触ってくれるっていうのは、こどもたちの触ってほしいっていう要求をどんどん満たしてくれるから、思春期になったときに本当に下心だけで触られたりとかしたのも、感覚的に何この人嫌だとか、そういうふうになくなるよって、全然触れないで抱っこされたり触られたりとか、マッサージじゃないけどいっぱい抱っこしてもらってぎゅってやってもらってってのがやっぱり足りない子は、思春期の頃になったら、とにかく下心でも何でもいいから触ってもらってギュッとハグしてもらってってなったらもうそれでもいいからってなっちゃうから、みんなにはきっと自分の

	こどもにはね幸せになってもらいたいってきつと皆思ってると思うから、今いっぱい気持ちいい触り方していっぱいやってあげてねみたいな話をしたんですよ。そして終わったらしばらく私いるので相談来てくださとか何かあったら言ってくださとかって赤ちゃん相談会ですけど、そしたら自分は性教育って受けてこなかったというのでそこでマンツーマンで性教育しました。避妊の方法とか知ってるみたいなどころからずっといろいろな話をしたんだけど、要はどこで誰に引っかかるかわかんないなと思いました。なんかそういうきっかけで、思いがけないか相談ができるっていう人もいるのかもしれないなというふうになんかいろいろやっぱりやらないとだめですよ、きつと。
会長	例えば今皆さんのお話を聞いて、すごく困った人もへのアプローチも含めて、これから作る施設がどういう施設なのか。理想の姿っていうものをしっかりと描かないといけないっていうところも含めて、どんな人がどんな専門職の方がいてどんな運営をされるのかみたいなどころもすごく考えなきゃいけないんだなと今日改めて感じました。 例えば尾島先生の方から先ほど冒頭の方で、コンシェルジュ、どのような役割なのですか？
委員	利用者支援事業です。こども子育て支援法の中で位置づけられている地域子育て支援事業の一つです。市役所だったり、あと長野市のばあいだと大きなこども広場とかにいろいろ相談を受けて、それで専門的なところや社会資源に繋げていくっていう役割をはたすという制度です。
事務局	利用者支援事業については現在も佐久市でもやっていて、柳沢委員さんもおっしゃっていただいているつどいの広場のサングリモ中込に1人います。コーディネーターと佐久市では呼んでいますけど、保健師であったり、助産師だったり臨床心理師、保育士など資格を持った方になります。つどいの広場のスタッフ2人と、コーディネーター1人という体制でサングリモをやっています。そのサングリモ中込のつどいの広場をこの野沢の拠点の方に移動するという大枠では考えていて、野沢の拠点でも利用者支援事業はやっていきたいと考えています。
委員	異年齢について、私も前回ワークショップ午前午後出たのですが、すごい意見が出てましたが、エリアは今決まってるんですか。このエリアは、この何歳までしか入れないとか。
事務局	私も皆さんに是非聞きたいのですが、多分長野市も広場は基本的には未就学の人たちが対象の年齢だと思います。そういうところに小学生が一緒に来て一緒に遊ぶとした場合に、小学生は非常に動き回って、乳幼児の方たちは怖い、危ないんじゃないかなと思うことがあります。 今佐久市のつどいの広場も、未就学を対象にしているので当然利用者としては、小学生以上の方は使えない形で、それは安全を確保するという点でもそういう整理で必要なのかなと思います。ただワークショップでは、そういう年齢の方も使えるほうがという御意見もあり、基本的には野沢でやるところで、そのつどいの広場という事業をやりたいと思っているところについては、やはり対象とすると未就学児とその保護者という形では思うのですが、ただ施設全体で見たり、その外の公園整備をしている部分もあるので、そういうエリアで見たときには家族で来ていただいて、お兄ちゃんとお父さんは外で、小さい子の中で、実際そういうところ利用はできるのかなというようには考えるのですけれど、それをそのつどいの広場に小学生も一緒に入って遊ば

委員	いというときには、ちょっと専門的な皆さんの視点からすると、その辺はいかがでしょうか。 きっと事故があったときにどうするのかという話で、事故が起こらないように年齢分けちゃうって話だと思いますが、兄弟がいるおうちでは下の赤ちゃんとかちっちゃい子はここで、でも上の子はここには入れないからあっち、でもお母さん 1 人しかいないみたいになったら、もうここ使えないじゃんって話になっちゃうからでも全然行ってもしょうがないじゃんっていうふうになっちゃうのは当たり前かなって気はします。 さっきの話で赤ちゃんが本当に減ってるから小学生のそれはもちろんここにチビッ子や赤ん坊がいるのにバーって隣走られたら、えーやめてってなるかもしれないけど、怒ったらいいいと思うんですよ。よそのうちのお母さんがここに大事なうちの子が寝てんだからそんな走ったら駄目ってわかるじゃんっていうのを言って、お母さんじゃない人でも注意したらいいと思うんですよ。それがないから、どんなふうに言ったら、ほかのお母さんたちがとか、この子のお母さんどこにいるのかしらとかじゃなくて、もうこの中にいたらみんな自分のこどもだと思って、駄目なことやったらみんなで怒りましょうみたいなにすればいいじゃんって私は思うんですよ。それができないから、何か今の世の中おかしくないことになってんじゃないかなって思うから、スーパーなんかバーってこどもが走ったら、スーパーって走るとこじゃないよねって結構とめたりとかする、するんですけど、本当に。だけど、親しかその子と見れないっていうのってすごく閉塞感があるし、ここに来たらみんなで見ようみたいなもちろん最終的な責任はお母さんねそのこどもの親かもしれないけど、でもみんなで見ようみたいなそういうスタンスがある場所にならないのかな。何かいろんな怒り方されたらこどもだっていいと思うんですよ。駄目だよって、何か優しく言う人もいれば、こらって大きい声出して怒られたりすることだってあるかもしれないし、でもそれがあるからこの時間帯は嫌だとか、この夏休みの期間はちょっと行きたくないってお母さんも出てきちゃうかもしれないけど、でもそれならそれでその時間を避けてくれればいいじゃんっていう話だと思うんですよ。なんか全員が満足するってやっぱ難しいから、お互いにちょっとそこは何て言うか、譲り合ってというか、夏休みの期間はそうだよって、ちょっと想像してみて、上にこの激しい動きする小学生とこの赤ん坊とお母さんちょっと怖いからちょっとこの時間は営業するのはこの時期はちょっと使わないで実家帰っておきますみたいなそんなだてがいいと思うんですよ学校が始まったらまたきますとかっていうのもいいわけだから、何か施設は 1 個しかないんだから、みんなで何か上手に使うよみたいな知恵出し合おうとか何かそうそういうふうにならないですかね。
委員	私も元々の設計のときにトイレがあまりにも異年齢が入れないんじゃないかと気にしてたんですけど、例えば養護施設なんていろんな年齢層の子がいて、やっぱり本当に性教育の話もすごく納得できるところは、何か変な本とかいろんなものを、あなたにはこういう話はしてるけど、この子たちに見せていいと思うとか、携帯の使用だって他の子との差が出るわけですよ。小学生中学生に見せていいかどうかって、そういうときってどう思うってこども自身に聞いて判断できる人と判断できないところはもうそのまま流しちゃいけないよね、勘違いしちゃうかもしれないからねって言って、こども自身にも自分より下の年齢の子を見たときに、これはやっていいとかやっちゃいけないってことを考えさせたりすることがあるわけで、初めから枠の設定が除外するようになってる

委員	と、全部お母さん頑張るなさいっていうことになってしまっ、こども自体もこどもを見る経験がないまま、異年齢の子とかあの下の子ってこれぐらいでやんなきゃとか、そっと歩いた方がいいとかそういうのをこども自身にも考えさせて、こども自身も自分も人のためになるとか、ちょっと気遣ってくれてあげたとか、そういうような自分がやって良かったような経験をできる場っていう場の仕組みっていうのはあっていいじゃないかなっていうふうに思うわけです。もう今の議論的には、ポピュレーションでどんな場があれば、みんなのその力が伸びていって場を設定を考えているところで考えれば、やっぱりそういう仕組みとすれば、すごい異年齢も入っていて、それをきっかけに教えられたり、考えこども自身も考えてもらったり、考えたことを見てすごい気遣ってくれるのねって言われたお母さんも嬉しくなるとか、そういうような仕組みっていうのはあってもいいのかなと思います。 実はうちの大学でやってる子育てサロンがあるんですね。あのプラスママの子育てサロンっていう名前の子育てサロンをやってるんですが、大学の卒業生で、子育て中のママたちがスタッフとして子育てサロンを開催するっていうことをやってるんです。幼児教育学科ですので、ほとんどの学生が保育者と専門の勉強して出ていくわけなんです、そのプラスのスタッフたちは保育者としてのキャリアもあって今自分が子育てをしているのでそのキャリアから離れて自分の子育てをしながら何ができるかってことを考えてその子育てサロンのスタッフをやっているのを、もう10年近く、10年以上続いている事業があるんです10年過ぎてくると面白いことが起きてきて、最初の頃に行った子育てサロンのそのスタッフは自分のこどもを連れてやってくるんですよ。なので自分のこどもと自分とそして地域の親子が集まってというサロンなんですけど、自分のこどもたちが地域のこどもたちと一緒に遊んでっていうことをしていくわけなんですけど、そういうとこだけ起こるかというときに異年齢保育っていうことが起きて、プラスママのスタッフのこどもたちは、そこでこどもスタッフとしての役割を知らず知らずのうちに果たしてくれるっていうことが起きるんですね。未就学のこどもたちのグループになってくるので、こどもたちが大きくなっていると卒業していくわけです。なんですが、このように夏休みになってくると卒業したこどもたちが、あのときはあそこで遊んだことがすごく楽しかったから夏休みだし来てもいいって言ってくるわけなんです。そうすると小学生になったその子たちは、赤ちゃんたち 012 のこどもたちなんですけど、この遊び方っていうのはもう見事なんですね。やっぱり走っちゃいけないもそうだし、この子たちが楽しく遊ぶためにはどんなことっていうことを自分も楽しみながらやるっていう見事な先生になっていくんですよ。これって大事な経験だなんて私は思っていて、今回の子育て支援拠点事業にも全部オープンにする時間だけじゃなくてももしかしたらそういう特別な時間っていうのも設定の中でやってみるといいのかなってのはちょっと思っています。そのときは必ず専門のスタッフが必要になってくると思うんですけどもその専門のスタッフっていうのは本当にプラスママのように子育てをしながらっていうようなスタッフがいれば、多分一番いいような気がしますが、でもそこで少し異年齢のこどもたちのグループがあってそこに専門の人からもっと大人もそういうグループがグループでの経験を経ると、そこでの経験は自分たちの中には大きくなったときに必ず積み重なっていったって培われていて自分が今後もうちょっと大きくなったらお兄ちゃんお兄ちゃんになったらちっちゃい子たちにどんなふうに関われるといいのかなそれは自分が小さい頃に関わってもらって楽しかったっていう経験があるからっていうことだと思うんですね。なので、もしかしたら
----	---

	ルを理解した上で、例えばルール自体も実際にみんなで話しあいながら作って定期的に見直しをするとか、ある程度ルールをわかって、ある程度施設の使い方を3回以上来てわかった人は、なんかボーイスカウトじゃないですけど何か教えられるというかマスターだからこの子に聞いてというような、大人でもマスターになれるし、小学生でも5歳でもマスターになれるし、何かスタッフだけで施設の責任を抱えずに、利用者の人もみんなで施設の安全をどうやったら安心して遊べる施設になるかをみんなで考えてもらえる仕掛けだったり、余白だったりをできるだけ作っておいた方が、①の問いにもつながるかと思います。言われた通りのルールでただ利用するのだと、やっぱり考える力だとか、育つ力っていうと、あまり育たない、その場を自分たちでどういうふうにしていったら、自分たちは他の立場の人が使うときも安心して使えるよう参加していける仕掛けがあると素敵だなと思います。
委員	相談に関しても、今もそれぞれその親御さんとかこども自身の力を期待して、それがこの運営に良い循環なりを産むってことでいえば相談しやすいというのも同じような形でね。仲間内とかひあだとそういう何し相談しやすかったり愚痴りたかったりいろんなこういうのあればいいよねって言いやすくてそういうのを拾い上げて、マスターがね少しを繋げてくる入るとかあの辺の人が権力者だから言えばいいとかみんなどこからそう言ってやっぱり困り事が拾ったりちょっとしたうまく拾ってくれていいわねって言ってちょっと下相談をいっぱいになっているような仕組みなんか。 もう自殺率の低い海部町って、何かご近所でよく喋る癖があって、そこら辺の人がそれちょっとあななんかに眠れないようならうつだから病院行った方がいいわよって、全然軽症だけど受診率が高くてっていうような、ものすごくガッツリ入るわけじゃないんだけど、軽口でちょっと言って、ぽっと促すのが上手なご近所の人たちとかそこら辺で喋るそういう環境があるらしくて、それってこういうマスターで私詳しくああそれはねっていう、なんかでもねあんまりしつこくは聞くことなくでしようし、何か相談にも事業にも繋げてもらうのもそうで、お互いに助け合ったり役に立つと嬉しいし、こどもとしても自分が役に立った、親としても何か自分も人のためになった、貢献できたっていうのも自信になると思うので、そういう仕組みはとってもいいんじゃないかと思う。
委員	つどいの広場とかも頑張っていくんだけど、行ったら何かもう既にグループができていっているように見えちゃう。そんなに深いつきあいじゃなくても、もう自分が入ったときには3人ぐらいで例えば集まってなんかそれっぽく話したら私はそこに入れないっていうふうに結構なりやすいし、本当にいろんな事業でいろんなところに行きますけど、みんな友達欲しいと思ってますよ。みんな話しかけてほしいって全員が思ってるけど、全員が思ってるから全然始まらないんですよ。隣にいる人にまずは挨拶して、隣いいですかって言って、こんにちわって言いながら座るだけで全然話できるよみたいな話をするだけで、それだけすごいなみたいになるぐらい、本当にどうやって繋がったらいいかわかんないっていう人がとても多くて、でも繋がりたいっていう気はすごくあるんですよ。なんか本当に、まずマスター的な、お住まいのこと、あの人同じだみたいな。本当にそういうぐらいちょっと強引になんか近くだからちょっと話してみたらとか、何月生まれの人あの人もだよみたいな、なんかそれぐらいやれる人が今本当にないと話し始めればねもう時間だよっていう、もう切るのが大変なぐらい盛り上がるのにみたいなのが本当にあるので何かそうやって繋がられるその仕組みすごくいいんじゃないかですね。

会長	いい意味でのおせっかいですよ。今柳沢委員さんの話も含めてすごくいいと思うので、それも前提で市の人たちにも何かあったらそっちじゃなくて、僕らもこれは持つてから、利用者も市を守るみたいな感じも含めて、一緒にタッグを組むっていうのをしっかりとやるとやっぱいいと思う。例えば冒険遊び場とかでも何かあったら所有者の問題じゃなくて自分の責任みたいな、ちゃんとそれをわかった上で乗ってというところがしっかりと出来れば皆さんもヒヤヒヤしないと思うので、みんなであっていうところが何かしっかりとできるといいのかなと思います。
事務局	異年齢のところはやっぱり大事だって思ってもどうしたらいいんだろうところで、いろいろなアイデアをいただいてこの施設に生かせればと感じました。高齢者も包括があって今何かあったら包括にみたいな、大体そういう感じになってきているんですけど、こどもの部分で何かあればこの施設に相談にすぐ来ていただけることということと、異年齢であつたらどういふふうに取り組んだらいいのかなという宿題をもらいつつ、今後組み立てていければいいのかなという感想です。 まとめみたいな感じですが、今回のお題でお願いしたところ本当に運営に大変参考になるようなご意見を頂戴したな、大変中身の濃い、考えなければいけない部分がある、運営体制を詰めていかなきゃいけないっていう課題が見えてきましたので、有難く、とても有意義な会だったと本当に心から感謝申し上げたい。いただいた意見等々を踏まえ、どういう形で施設にフィードバックできるか検討します。本当にありがとうございます。
会長	時間になりましたので、今回の議事は全て終了といたします。 以上